

今回、初めて日能研文学コンクールの応募作品を、入選作を中心に読ませてもらいました。まず申し上げたいのは、作品の長さの問題です。多分、なんとなく書いてみたら、その結果が十枚だった、あるいは三十枚だったという人が多かったと思いますが、作品は長さによって性格や書き方が違ってきます。短編の場合は、基本的にひとつかふたつの場面を中心にして、登場人物もぐっと絞り込みます。中編や長編なら、基本的なストーリーと共に、それにまつわるエピソードや脇役たちも重要になってきます。教科書の作品や短編集などを読んだ時に、それが原稿用紙で何枚くらいになるのかを数えてみて、何枚ならどれくらいのことか書けるのか、ある程度見当がつくようにしておくことが重要です。

入選作の「二年六組の守り神」は、高校の二年六組だけに現れる「守り神」にまつわるファンタジーで、こういう作品はある程度の枚数が必要になります。守り神が毎年違う名前をつけられるという設定がいいし、守り神が出現したことでクラスの間関係が変わっていくという展開もいいと思いました。但し、この長さで最後クラス全員が心を合わせるところまでいくのは無理。もう少し抑えたラストにしてほしかったと思います。

準入選の「私がスキーに行った日」は、子どもにとっての〈夢〉というテーマというか、問題意識が作品に力を与えていました。ただ、スキー場で出会う若い女性とのエピソードは、特にスキー場でなくても成立する物語で、せっかくの作品の舞台が生かされてないように思いました。

同じく準入選の「エメラルドの島、沖縄」は、五作の内唯一の紀行文で、力作でした。ただ、沖縄をめぐるさまざまな問題のレポートという感じもあって、このままだとよほど興味、関心をもった読者でないとなかなか思いついてくれないように思います。まず、題材を思い切った一つか二つにしぼること、それから紀行文なので、これを書いている〈私〉がもう少し見えてくるような具体的な描写を増やすことで、読者がこの世界にはいりやすいようにしてほしいと思いました。